令和６年２月 27 日
浅川清流環境組合

第 16 回クリーンセンター連絡協議会（令和６年２月 17 日）での質問に対する回答

問）
施設に発電機があって、井戸水を使って発電をしていると思いますが、旧炉と比べてどれくらい水量アップしているのか、１日何トン使うのか、あるいは何割か地下に戻しているのか。地下水を使って２・３年の変化はしていないのか。国立とか立川とかで PFOS という地下水の問題があるが、ここの井戸では検出されていないのか。その水から蒸気として拡散した場合、問題ないのか。定点測定の資料ではどこを見ればわかるのか。鉄塔まで備え付けての大規模の発電をしている。井戸水の汲み上げをしていると思うが、水位の変化を知りたい。落川交流センターでも井戸水を年間通して組み上げて動植物の調査をしているので、水が枯れると困る。

答）
当組合の施設では、ごみを焼却した際に発生する熱をボイラに送り水を加熱して高圧蒸気を発生させ、蒸気タービンの羽根を回転させ発電機を動かし発電を行っており、発電量の約４分の１は施設で使用しておりますが、約４分の３は契約している事業者（R5 年度：バイオマス分を東京電力、非バイオマス分をミツウロコグリーンエネルギー㈱）に売却しております。
施設で使用する水については、主にボイラ用水、機器冷却水、燃焼ガス冷却用噴霧水、灰冷却水などのプラント用水、洗車水、生活用水を目的としており、毎日定期的に井水をポンプアップし、１カ月で約 750 ㎥（２炉とも全日運転した令和５年３月の実績）使用しております（稼働前の日野市の施設（焼却施設、不燃ごみ処理施設、汚泥再生施設）における揚水量は、最大でも 200～300 ㎥/日でした）。なお、必要分だけポンプアップしておりますので、地下に戻すことはしておりません。
続きまして、水位等の計測ですが、現在は行っておりませんが、当施設稼働前後に環境影響評価の中で地下水、流況の変化の計測を実施しており、施設が稼働した令和２年度、施設内６カ所、地下水位の計測をしております。地下水については当施設の西側（浅川側）から東側（多摩川側）に流れており、地下水の水位を計測したところ、工事の中で、揚水量が増加した平成 28 年度前半は水位の低下があったものの、平成 28 年度後半から揚水量が減少したことに伴い水位は回復し、稼働開始した令和２年度以降は、降水量により多少の変動はありますが、過年度と同程度となっており、建設工事及び施設の存在が地下水位に及ぼす影響は見られなかったと評価されております。
水質検査については、井水を水道法第４条の規定に基づき、「水質基準に関する省令」

で規定する水質基準に定められた 50 を超える項目の検査を毎月受け、すべての項目が基準値以内の数値となっております（PFOA、PFOS は含まれておりません）。令和 4 年 12 月に東京都の飲用等水質実態調査において PFOA、PFOS も含まれた項目の水質の測定を行いましたが、暫定の目標値以内でした。

当組合では焼却炉運転時は年 2 回、焼却炉停止時は年 1 回行っている環境定点測定において 4 地点の二酸化硫黄、浮遊粒子状物質、二酸化窒素、ダイオキシン類、塩化水素、水銀などの測定をし、いずれも法律に定める基準値、指針値以下の数値ですが、排ガス濃度中に PFOA、PFOS がどれくらい含まれているのかについては、測定項目となっておりませんので、不明です。